

新収集資料紹介 モロッコとロシアの三葉虫

田口公則 (学芸員)

特別展に向けて、おもしろい形の三葉虫の化石を収集しました。三葉虫は、古生代(5.7億年前~2.45億年前)の海に繁栄した節足動物の仲間です。1万5千種もの種類が見つかるほど多種多様な三葉虫が生きていましたが、古生代末におこった海洋生物の大量絶滅の際に三葉虫は絶滅しました。

近年、ロシアとモロッコで三葉虫の発掘が進み、たくさんの変った三葉虫が見つかっています。その中からいくつかの三葉虫を紹介しましょう。

ロシアから見つかる代表的な三葉虫の一つがアサファス・コワレフスキ(*Asaphus kowalewski*)です(最近、ネオアサファスと分類されることもあります)。飛び出した眼がとてもかわいらしい三葉虫です。化石産地であるロシアのボルコフ川(Wolchow River)からは、このコワレフスキをはじめとする愛嬌たっぷりのアサファス類が多く見つかっています。特徴的な飛び出した眼は、体を泥に沈め眼だけを泥の中から出すという、まるで潜望鏡のような役目を持っていたのでしょう。

モロッコのエルフド(Erhoud)を中心とする化石産地からは、さらに奇妙な三葉虫がたくさん見つかっています。

アサファス?の一種(*Asaphus?* sp.)は、モロッコでも大変珍しい三葉虫です。とても大きな三葉虫で全長がおおよそ30cmあり、おまけに頭の端にはひげのようにのびた棘をもっています。何のための棘だったのでしょうか? 前述のロシアの三葉虫とおなじオルドビス紀の三葉虫ですが、おなじアサファスの仲間かどうかよくわかりません。新種の可能性のあるものです。

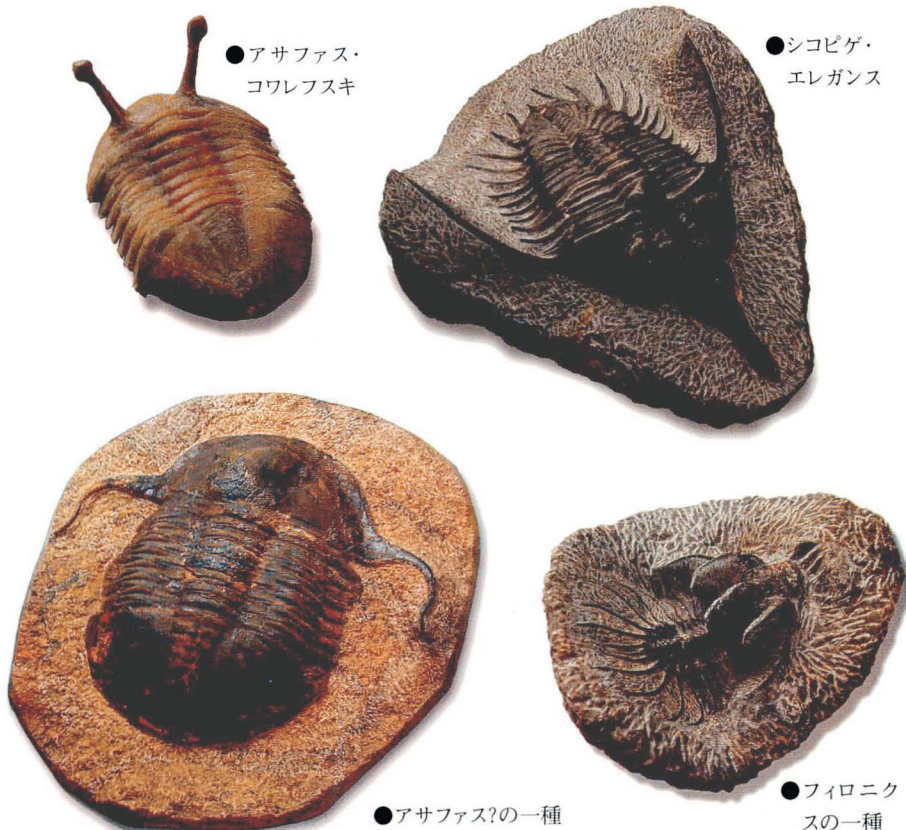
シコピゲ・エレガンス(*Psychopyge elegans*)は、棘のある優美な三葉虫です。頭の先が嘴のように長くのびるのが特徴です。まるで長さや鋭さを競いあっているのごとく、その長さが体長の約半分を占める個体も見つかっています。この‘嘴’は、泥に潜るときに便利だったのではと考えている人もいます。モロッコのデボン紀の地層から見つかったものです。

同じデボン紀のフィロニクス(一種(*Philonyx* sp.))は、さらに棘の装飾が派

手なものとなっています。体中に棘をもつのですが、なんと眼の上部と頭部の中央から3本の角のような棘がのびています。三葉虫は、最初に複眼をもった生物の一つですが、眼から角をのばすとは不思議な気がします。

このように棘をたくさん持つ三葉虫は、よほど熟練した人でないと化石のクリーニング作業が大変です。この標本も、角の部分にまだ母岩が詰まっています。最近、ロシアとモロッコから棘を持つような立体的な三葉虫が続々と見つかっているのは、それだけ三葉虫のクリーニング作業に熟練した人が育ってきている証でしょう。たった今でも、どこかで熟練者が、クリーニング作業を進めながらびっくりするような三葉虫を取り出していることでしょう。これからどんな姿の三葉虫が出てくるのか楽しみです。

この秋に今回紹介したような三葉虫をはじめとする古生代の生き物たちについての特別展を予定しています。ぜひ5億年前の海をのぞきにきてください。(展覧期間 1999/10/1~11/28)



●アサファス・コワレフスキ

●シコピゲ・エレガンス

●アサファス?の一種

●フィロニクス  
スの一種



●フィロニクス(一種)

自然科学のつばら  
第5巻第3号 (通巻第18号)  
1999年8月15日発行  
発行 神奈川県立生命の星・地球博物館  
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499  
Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846  
<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/museum/g.html>  
e-mail: plan@pat-net.ne.jp  
発行人 濱田隆士  
編集 田口公則  
印刷所 フルサワ印刷株式会社

自然環境保護のため再生紙を使用しています